
the memory is sweet

東野咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t h e m e m o r y i s s w e e t

【Nコード】

N 8 2 6 2 M

【作者名】

東野咲希

【あらすじ】

もう置いてくるって決めたのに、どうしてもその笑顔を見れば甘い記憶に取り残される。
蘭のひとつのものがたり。
新志前提です。

変わってないね（前書き）

新＋蘭です。＋です。

変わってないね

木漏れ日あふれるカフェは、さらさらと爽やかな風が撫でてくれる。

おしゃれなお店だけれど、値段はお財布の味方。

カフェモカをくるとかき混ぜて、その渦を見つめた。

いまから会うひとに、ちゃんと隠せるように。

ふと顔をあげると、透明なガラスのドアの向こうに、待っていたひとが来た。

ああ、もう。

なんでこんなに揺れちゃうんだろう。

「蘭！」

息を切らしてテーブルを除けながら走ってくる、幼なじみ。

「もー遅いよ、新一」

おどけて笑う。

いつものように笑い返してくれた。

かわってないね、なんて思うけど。

でももう、その瞳は私を映さない。

目を凝らしても、後ろの観葉植物が光を受け輝いているのが婉曲しているだけだった。

コーヒーを店員さんに頼んだ新一は、ゆっくり私に向き直った。

「久し振りだなあ」

「うん。最後に会ったの、志保さんが子供産んだときだもんねー。二年ぶり？」

「ああ」

穏やかに私を見つめる。その顔を、まっすぐ見ることが出来ない。

おかしいな。

これで最後のはずなんだけどな。

「耳、ちゃんと傾けて！　ね、訊いてね」

「ん？」

言葉の通りにした耳に、そつと震えているだろう声で、囁いた。

「私、結婚するの」

一気に胸の奥でもこもこわき上がっていた緊張が、ふわりと溶けた。

横顔は、びつくり、みたいな感じだった。

動揺させることが思いの外楽しくって笑いを噛みしめる。

「俺の知ってる人？」

「新出先生だよ」

「え?!」

「なんか文句ある?」

「いや別に・・・時が経つのは早いなあと」

ほんほんもうそんなんだ、はあはあとしきりに頷く新一を、透けたお日様の光が照らす。

「おじいさんみたいね、新一」

「それ、志保にも言われた」

胸の奥がちくりと痛い。

「志保」

そう呼ぶ新一の眼差しと声は、すごく暖かい。

もしひとつボタンをかけ間違えたように、偶然が今になっていたら。

その暖かさは、ひよつとしたら私の元に？

だめだめだめ。

ぐるぐると汚い思いが渦巻くのを振り切り、首を振った。

くらくらした。

「ほんと、志保さんにべたばれだよねえ。嫉妬しちゃう」

「・・・蘭」

ちよつと神妙な面持ちになった新一をごまかすように、笑って「冗談だよ」と吹き飛ばした。

直接、好きと言ったことはない。
だけど、気づいてなかったはずはない。

それにうぬぼれて、クサイ初恋ごっこして。

あのころの私はあまりに子供っぽくて、今思い出すと穴の中に入りたいくらい恥ずかしい。

「つい最近プロポーズしてもらって、それですぐ、ね」

「そっか・・・、式はいつ？」

「今月。ほら、ジューンブライドって昔から夢だったのよね。園子と、流行ってた恋愛モノのドラマの真似で結婚式ごっこやったでしょ？」

「どんだけ昔の話だよ・・・新郎役で付き合わされてたよな」

苦い顔しながらも、やっぱり懐かしいでしょう？

いつか、大きくなっても真っ白なウェディングドレスを着て、隣に並びたいなあとか無意識に思ってた。でもそれは本物にならないままだった。

新一との思い出、きっぱり断ち切るために覚悟決めてきたんだからね。

未練たらたらとは違っでしょ？

でもさ。

同じ。

風が、新緑に染まったようにきらきらと輝いて、反射する。

新出先生と頑張っていくって決めた。

あのころの芳醇なものに縋る気持ちを、捨てきれないだけなんだ。

めんどくさいなあ私って。

「蘭」

ふと、本当に柔らかく暖かく、悔しいけど大好きな声で名前を呼ばれる。

俯いていた顔をあげると、まっすぐしなやかに私をみる碧い瞳があった。

「・・・幸せになれよ」

伝票をつかんで静かに席を立つ背中を、ただ見つめるだけの時間はモノクロだった。

遠ざかってゆく。

待って、って言おうとした。

だけど、言えなかった。

言ってどうするの。

何も言つことなんかない。

「・・・ばか」

伸ばしても何もつかめなかった手が、力を失いだらりと垂れ下がった。

いつもそうだね。

砕け崩すことばかりする。

それが、無意識なもんだから、余計に憎らしい。

私、なんのために今日、会おうって呼び出したのかな。

吹っ切るつもりだったのに。

「新一がいなくても私ちゃんとやっていけるから」って、ちょっと冷たく突き放してもいいかななんて思った私はただの馬鹿ではない。

だめだ、やっぱり。

深く深くため息をついて、ぎゅっと組んだ腕の中に顔を押し込んだ。
だ。

今、どんな顔しているのかわからなかった。

b e c o u n t i n u e d ...

t o

変わってないね（後書き）

短編集の方に上げていたのですが、三話くらいになりそうだったので移行いたしました。

近く、二話をupしたいなあ。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

あのひとだけは、
(前書き)

志
+
蘭。

あのひとだけは、

「あら、」

「あれ、」

二人同時に、声が被った。

「志保さん？」

「蘭さん」

その綺麗な立ち姿と、降り注ぐ日光できらきらしている赤茶の髪の毛ですぐわかった。

バスを待つてるだけで見てしまう人なんて、きっと志保さんだけなんじゃないかと思う。

「久しぶりですね、志保さん」

「そうね」

優美に微笑む志保さん。

私も笑いかえす。

どうしたらこんなに美しく微笑できるのか教えて欲しかった。

「志保さん、明くん居ませんけどどうしたんですか？」

明くんは、志保さんの子供さん。

透き通った深い緑の瞳と真っ白な肌は志保さん似、顔つきや性格は新一そっくり。

本当に二人の子供なんだと、生まれたときに抱かせて貰って胸が熱くなったのと同時に切なくなったのも覚えている。

「博士と遊園地に遊びに行ってるわ。二人きりの方が楽しそうだったから」

「で、お出かけってわけですか」

「ちょっとね」

そのとき、志保さんの整った顔に憂いみたいなものが薄く掛かった気がした。

それが気になり、口は馬鹿なことを言い出した。

「ご迷惑じゃなかったら、一緒に行きませんか？ ほら、志保さんみたいな美しい人が一人歩きしてたらいつ狙われるか分かりませんし。私だったら後ろ蹴り喰らわせますし！」

笑顔を作って、軽く空手の構えをしてみせた。

このまま志保さんを放っておけない感じがして、不安になる。

少し目を見開き、そのまま私をみつめると首をことんと傾げた。

「あなたにとっては、きつとつまらないところよ？」

「構いません！」

「私、変な話をしてしまうかもしれない」

「全然！ 志保さんのお話なら興味あります」

「・・・なら、次のバスで」

強引に押したのに、何も言わない。

志保さんの横にちゃんと並んで、いつか来るだろうバスを待ちながら二人、待った。

「志保さんって」

「ん？」

「本当に、私とひとつしか変わらないんですか？」

ハーフだというからか、その姿は日本人とはどこか一線を保っていて、でも日本人特有の柔らかなで繊細な美しさも持っていて。

ヘンに媚びたりベタベタすることは決して無くて、いつもストリートな物言いだけどキツい印象はない。

一度、新一と事件現場にいたのを見たことがあるけれど、凜としたたずまいと端正な目つきであきらかに他の人とは違うものを発していて、あとで警察の男の人たちに言い寄られていたのをめんどくさそうに交わっていたのが印象に残っている。

それに、そっちの方面では知らない人はいないほどの有名な科学者で大きな学会の賞も何度が取っているらしい。

他にも挙げたらきりはないけど、ほんとうに才色兼備って志保さんのことを言うんでしょうね。

「いままで、いろんなこと騙してきたけどこれは本当よ？」

苦笑する志保さんのいつていることがいまいち分からなかったけど、曖昧に頷いた。

「でも、どういつ風に生きてきたら志保さんみたいになれるのか
なってずっと思つてたんです」

「私みたいに？」

けたたましいエンジン音が近づいてきて、私は財布を取り出して
目的のバスに乗り込む。

人が一人二人俯き気味に散らばっているだけだった。

私は後ろの二人がけの席の通路側に腰を下ろし、志保さんはその
隣の席の通路側に座った。

少しの距離がなんとなく、寂しい気もするけどこれくらいがいち
ばんいいのかも知れないとも思った。

「それはかなりの損失になるわね」

「損失？」

いたっていつものように言うから、どういつ反応をすればいいの
か分からなくなつてしまつた。

「だつてもしあなたが私みたいに生きてきたとしたら今のあなた
は確実に存在していないわ」

「生きてきた」

「あなたを大切に思っている人にとって、損失だってことよ」

志保さんは軽く微笑みながらそう言って、鞆から厚い文庫本を出して読み耽っていつてしまった。

抽象的にとらえても奥深くの本音は見えない。

ただ、志保さんが頭のいいひとだということが分かったただけだった。

（ほんと、なんなんだろう）

窓の外は、山と街が入り組んだ緑まじりの景色がすぎていった。

「ついたわ」

ふいに文庫本から顔を上げて、窓をみた志保さんが言った。
いったというより、零れたというほうが妥当かもしれない。

青花灯（せいかうとう）墓地前、青花灯墓地前、かすれた声のバス
運転手さんが読み上げて、私と志保さんは降りた。

夏だっというのに、冷たい風が転がってゆく。

日差しも心なしか薄いよう。

あたりを見回せば、田んぼが広がり舗道すらもないテレビでみる
ような田舎だった。

「どこへいくんですか？」

「あそこ」

志保さんが指すのは、道の向こう側。

なだらかな山のふもとに広がるのは田んぼじゃなく、お墓だった。

私はその顔をみた。

なにが言いたいか分かったように、

「家族がここにいるのよ」

ふつと表情を変えてくれた。

お墓のあいだとあいだを縫って、私たちは水の桶を下げひとつのお墓に来た。

白い文字で、「宮野家之墓」と刻まれている。

花をいけるところには枯れた花もなく、お線香の燃えかすもない。墓石も綺麗。

つい最近、亡くなったのかなんて不躰なことを考える。

静かな空に、ときどき木々が揺れてかすれる音だけ。

ぴちゃり、と水をお墓の頭にこぼして、志保さんの瞳が緩んだ。

「ここには、父と母と姉がいるのよ」

「父と母と、姉・・・」

それきりなにも言えない。

「父も母も、私が物心つくまえに死んでしまつて顔は知らないの。姉も、私が十代の時に亡くなったわ。」

長らくお墓をつくつてあげられなかったけれど、今日やっとまた逢えた」

「はじめて・・・お参りするってことですか」

「ええ」

私の言葉にこたえてくれているはずなのに、それはお墓のなかにいる家族に向けられているよう。

あたりまえだ。

なくした家族に、今日「久しぶり」をいうのだから。
私との言葉とは重みが違う。

のこのこついてきた私つてやっぱり阿呆だ。後悔する。

帰らなくちゃ。

そんな本能が反芻して、くるりと背を向けようと体が動こうとする。

さっきとは違う静寂が、流れていくのがわかる。

きっと、志保さんはいちばん伝えたかったことを、いいたかったことを、言いたいんだらう。

そこに私がいる理由なんてない。

「ちょっとまって」

志保さんのメゾソプラノが後ろからかかって、私はなぜか嬉しくなる。

止めてもらうことを望んでいた？

ここにいたかった？

うつん、違う。

志保さんのこと、もっと知りたいんだよ、私は。

「お参りは、また今度にするわ。お姉ちゃんたちだって、蘭さんを放っておいて欲しくないでしょうし」

「私のことはお気になさらず、」

「いいから。私もちょっと、蘭さんとお話したいの」

「言いたいこと？」

私は首を傾げた。

「まあここじゃ暑いから、日陰で休みましょうか」

白い指がさしたお休みどころのわきには、水たまりほどのせせらぎが流れていた。

ひとつだけあった自動販売機のお茶の冷たさを手で転がしながら、ベンチに座っていた。

ふたりきりのなかで、自然の音だけがとけこんでいく。

「静かです、ね」

余裕をとったひとつひとつのお墓がたくさん並んでいるその向こうは、草原らしい。

もしかしたら田んぼかもしれないけれど、だったらこの季節茶色く風になでられているはず。

ベンチの脚の隙間からはみ出す小さな青い花を摘み取って、くるくるとまわす。

そのあいだも志保さんは、遠くに瞳を投げたままだ。

「私はとことん、不幸を持ち込む女だって思ったわ」

「え？」

まるでひとりごとのように言うので、私にかけられたものだと一瞬わからなかった。

「工藤君に、子供が出来たってつたえたときに。

子供さえできなければ、ましてやそれを伝えずに彼の前から姿を消したなら、あなたと工藤君は結ばれていたかもしれない。

・・・蘭さんが、結婚するってきいたとき、なんだか潰されそうになった」

瞳はそのまま。

だけど、どこか虚ろにみえた。

「蘭さん」

「・・・はい」

「まだ、工藤君のこと吹っ切れていないでしょう」

「、」

まもなく核心をつかれ、息がつまった。

声がつまぐでない。

何か言おうとするのに。

これじゃ肯定してるのと同じじゃない。

「やっぱりね」

やさしくやわらかに微笑まれた。とても綺麗だった。

でもみとれてる場合じゃなかった。

「だ、だって私もう結婚するんです。いまさらいっても、」

「吹っ切るために、このまえ工藤君と会ったんでしょ？」

ここまでいわれたらもう口を綴じるしかなかった。

「……怒ってますか？」

昔の幼なじみが自分の旦那と会ってるなんて、普通はよく思うものではないはず。

だけど、志保さんは「まさか」といつて首を横に振った。

「怒っているとしたら、そうね、工藤君にならちよつとね。なんの疑いもなく蘭さんと話して、気づかないの。」

無意識にまたなにかたぶらかしてるんじゃないかって、蘭さんが心配なの」

「私が？」

「ええ。わたしがいなかったら工藤君が選んだのはまちがいなく蘭さんだったでしょう。だから・・・皮肉かもしれない。だけど、蘭さんは昔の命の恩人だから」

「命の？」

首を傾げた。

そんな、命がかかるほどにあぶなかったところを助けたことがあっただろうか。

「昔の話よ。でも忘れない。あのころからかしら・・・あなたにおねえちゃんの影を重ねるようになったのは」

「お姉ちゃん、というと」

「お墓にいる姉よ。明美っていうの」

「そのひとが、私に？」

「ええ。いつも光のなかにいて、いつでもやさしくて。他人の心配ばかりしていたわ。年下なのに、とても似てる」

「お姉さんが、わたしに・・・」

私は一人っ子だからそれは身を以て感じるものではないけれど。

昔、風のように現れ風のように消えた、黒縁めがねの男の子を思い出した。

あの子が可愛くて仕方なかったのも、どこか新一に似ていたからかも知れない。

はじめて志保さんの気持ちが少しばかりわかって、なんだか嬉しくなった。

「だからなんだか蘭さんが気になって。

できることはなんでもしたい。・・・おねえちゃんにできなかった

た恩返しを、あなたにしてみたい。

押しつけがましいけどね」

きゅぷりとピックをあけてお茶を飲み込む志保さん。

手の中の缶がぬるくなっている。

私もあけて急いで飲み干した。

火照った身体に染み渡る冷たいお茶が、頭を痺れさせた。

「・・・新一が、ほしっていったら？」

急に魔が差して、ぽつりつぶやいてみた。

ふとふりむいて志保さんの顔をみてみた。

翠玉のような瞳をふせて、笑う志保さんは綺麗で。

「できることなら、譲りたいけど・・・ごめんなさい。工藤君だけ、だめなの」

いたずらっぽく、志保さんの微笑みをまねしてみた。
たぶん全然似てない。

「あんな奴でも、ですね」

「あんなひとでも、よ」

視線が絡まって、ぷつとふたり、吹き出した。

くすぐったいような心地よいようなこの時間が色褪せずに、
と続けばいいのと思った。

あのひとだけは、（後書き）

あと一話で完結予定です。

さわやかな感じがして書いてて楽しかったです。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

記憶は甘い

「蘭、おめでとぉーっ！ー！ー！」

親友のかけ声に、あとから続いておめでとぅ、とみんなが叫ぶ。
なんだか照れくさくて、私はタキシード姿の新郎さんに苦笑いをした。

今日は本当にいい天気だ。

夏の終わりといっても暑いけれど、そんなの気にならないくらい私は満ち足りている。

「らぁぁん、やっぱりいくなぁぁー！！！」

「だめよ、おじさま。蘭は幸せになるために結婚したんだからね、蘭」

「あはは、だいじょうぶ。お父さんの面倒はお母さんがみてくれるから。わたしも遊びに行くよ」

ぐでんぐでんに目が充血しているお父さんを戒める園子。

なんだかおかしくて、声に出して笑った。

「蘭」

「へ？」

ふらふらと千鳥足でお酒のあるテーブルへと向かっていったお父さんを見送りながら、園子の顔が真顔になった。

「まさか、こんな未来がくるとはあたし思ってたわ、高校生のときは」

「・・・園子」

いまから言うことがわかってしまう。

浮かんでいた気持ちがいっせいに落ちて着いた。

「ふつつに、あいつが帰ってきたら幼なじみは離脱して、自然に結婚するもんだと頭のどこかで当然のようにきめてた。でも、違

「ったわね」

「・・・うん」

「蘭が今、心から幸せだっていうのが、すごくわかるんだよ。でも、なんていうか、納得できないっていうか・・・あぁっもう、うまく言えない」

頭をくしゃくしゃとさせて苦虫を噛み潰したように歯を食いしはる。

ふいに、言葉が頭をよぎった。

『だってもしあなたが私みたいに時間をすり抜けてきたとしたら、今のあなたは確実に存在していないわ』

『あなたを大切に思っている人にとって、損失だってことよ』

ああ。

私、いままでこうしてきたから、いま此処にいれるんだね。

お父さんとお母さんが喧嘩ばかりして素直にならなくて、一生懸命受け持ったり。

米花町に迷探偵の娘として生まれてきて、新一が幼なじみで、園子が親友で、探偵団のみんながいて。

恋人でもなかったくせに電話してこないと泣いて怒ったり、ずっと初恋の淡さに夢みていたり。

いろんな事件に出くわしてあぶない場面がなんどもあったけれど。

いままでのつらいことも、嬉しかったことも愚かなことも、それすべてが、今ここをつくってるんだってこと、やっとわかった。

（志保さんも・・・きつとそうなんだよね）

遠くで綺麗なワンピースをきて、探偵団のみんなに囲まれて穏やかに笑みをみせている志保さん。

ため息をついて、園子に笑いかけた。

「だいじょうぶ。今、すっごく楽しいの。たぶん、すっごく幸せ」

「・・・幸せ、なの？」

心配そうな顔。

だいじょうぶ。

いままでになんの後悔もない。

「うん」

でもなにか、このまま慣れ親しんだ顔をみていたら脆く崩れてしまいうさな気がした。

崩れるものなんてなにもない、それは本当なのに。

なにが脆いというのだろう。

「じゃ、私推理オタクさんのとこ行ってくる。私という見張り役がいなくても志保さんをほっぽらかさないようにね」

明るく言つと、丸い目がもつと大きくなって吃驚しているようだった。

でもそれからすぐ、見慣れた勝ち気な表情^{かお}になつて。

「うん、ちゃあんと言つときなさい。もし忠告を無視したら回し蹴り喰らわせるわよつて」

「うん、言っておく。園子、ありがとう」

「いいのよ」

園子の横をすりぬけ、つかかりそうなヒールの高い靴で志保さんへ一直線していった。

向かうこつちに気付いたのか、志保さんは顔を上げてにこりと笑つた。

皮肉でも自嘲でもない心からの笑み、もしかしたらはじめてみたかもしれない。

「蘭さん、おめでとう」

「ありがとうございます、志保さん、綺麗です」

ベージュの薄いビロードで体を纏った上品なワンピースは、花嫁であるはずの私より輝いている。

志保さんが苦笑した。

「それはこっちが言うべきセリフじゃないの？」

「あつ、たしかにそうですね」

「やっぱり似合うよな、蘭。これ俺が買ってきたんだけどベージュなんか着るの嫌だって聞かなかったんだぜ」

横からスーツ姿の新一が入り割ってくる。

悔しいけどかつこよかった。

「だって薄い色は汚れが目立ちやすいの。黒にしてって言ったのにどうして買ってくるかしら」

「黒も綺麗だけど、志保の肌色ならベージュが上品に仕上がるんじゃないかって」

「あら、私はもしあなたという事件に遭遇して返り血あびたらってことを考えていつも黒を着てるのよ」

「大丈夫今日は蘭の結婚式だから事件に遭遇するわけにはいかねえって思ってたな」

「ええ本当になにもないからよかったわ。結婚式に殺人事件だなんて、一生の悪い思い出になるからね」

「あのなあ」

夫婦のように、ああもう夫婦だね、口げんかするふたり。

それは昔のような私と新一がだぶる。

少しの懐古だけ、感じた。

「でも志保さんの言うとおりよかったよ事件がおこらなくて」

「まあそりゃあ念だよ念。蘭の大舞台となれば念がきくんだ」

「念かあ。ありがとう」

念なんていう柄じゃなかったのに。

だんだん知らない新一になっていく。

志保さんだけが知る新一がたくさんいる。

幼なじみというくくりは、そう簡単に解き放てなかった。

結局、私たちに結ばれる必然なんてなかった。

「だけど私、新出先生との必然に出会えてよかった」

「え？」

「ううん、なんでもない。それより新一、私がいなかった志保さんと明君ほっぽらかして事件に明け暮れちゃだめよ。志保さん、そういうことあったらすぐ私にいつてください、回し蹴り喰らわせに飛んできますから！！」

「え？！　おいおい勘弁してくれよ俺お陀仏になっちまうぜ」

「わかったわ。回し蹴りでダメージ喰らわせた後は私の所へ引きずってきてね、新薬のモルモットにするから」

「えええええ」

妙に楽しかった。

人と話してるだけで、こんなに楽しいなんてことあっただろうか。もしかしたら慣れてしまっていたのかも知れない。話すということに。

今が幸せじゃないと記憶の甘さにとらわれて進み出せない。で
も幸せであれば。満ち足りてあれば。

ないものねだりの甘さを記憶にもとめることもなくて。

そこまでいくのが大変だけど。

「ねえ、志保さん、」

「なあに？」

くるりと振り向いた志保さんに、脇目もふらず叫んだ。

「私、今、とっても幸せです！」

記憶は甘い（後書き）

わけのわからん最終話で申し訳ございません。もっと丁寧に書けたらよかったのですが。

結びがあんまりにも難しくずっと唸ってました（・・）

ここまで読んでくださりありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8262m/>

the memory is sweet

2011年10月6日22時55分発行